

風の電話

をたどって

6

tadotte@asahi.com

岩手県大槌町の「風の電

話」について、被災地で取材した同僚の東野真和記者は「違和感」を覚えた。だが当初、被災地の少し外にいた私は、そうは感じなかった。違いはどこからきたのか、ずっと気になっていた。

風の電話を知って、私は震災の緊張感から一瞬でも解き放たれるような感じがした。

「風」という言葉のせいもあったかもしれない。

電話を設置した佐々木格さん(70)に、名前の由来を尋ねた。すると「風の便りだよ」

との答えが返ってきた。

風の便り。どこから来るのか、はつきりしない知らせ。ひよっとしたら、ただのうわさかもしれない。

ここという風とは何か。70年近く風を追い続けている筑波大学名誉教授の吉野正敏さん(87)が岩手県雫石町に住む。気象学者として自然の風を研究する一方で、暦や地名、文学、風習などに登場する風についても考察してきた。訪ねると、風は「えたいのしれないもの」という。

風は意のままにならない。

えたいのしれない 自由な便り



風の電話ボックスの中。武川博久さんが筆書きした詩が正面にかかると＝岩手県大槌町吉里々々

だから、あいまいさや、よそよそしさの表現になる。風まかせ、夫婦間のすきま風……。一方で、そこはかとなない趣も表す。風情、風雅……。「受け取る人しだい。その人の心の動きを表現する」

風の電話を訪れる人の数、佐々木さんはずっと記録してきた。ボックスは被災した海岸を望む小高い山の中腹にあり、行きやすい場所ではない。それでも、1万6千人以上の訪れたという。

連載4回目で、風の電話を素材にした絵本「かぜのでんわ」に共感した女性たちを紹介した。彼女たちは風の電話に足を運んではいない。絵本を通じて、そこで会話する自分の姿を想像した。

「何も聞こえないのは分かっていて、つながっていない」「身近にあったら、どれだけでもさめられるか」

絵本は、作家が現地を訪れないまま、感性で描いた。登場するのは動物で、空想の物語だ。それでも、思いが風に

乗ったかのように伝わり、幼い子どもや夫を突然失った女性たちを癒やした。

それぞれが自由に何かを感じている。ボックスに足を運んだ人もそうだったのだろう。持ち主の佐々木さんも想像しなかったかもしれない。受け取る人しだい。風の便りなのだ。

被災地の岩手県釜石市に赴任して1年半近かった。実をいうと、風の電話に同僚が

抱いた違和感が、私にも少し芽生えた気がする。復興の進まない被災地と、風の電話のある穏やかな庭園との落差は、やはり大きい。厳しい現実には、日々直面しているから実感するのだろう。

置かれた状況によって、同じものを見ていても、自分の中で感じることは変わる。どちらが正しいとか、間違っているとかいうことではないと思う。ときに違和感を抱えながらも、何かを伝えようと記事を書く。あとは読んでくれる人しだい。伝わったことに、本質は宿ると思いたい。

(山浦正敏)

◇次は、江戸時代に朝鮮半島との交流に尽力した雨森芳洲をたどります。